倒叙体の可能性とインド文学史の構想

2011年11月05日
インド文学史研
臼田雅之

Ⅰ．倒叙法とは

「新しい時代から古い時代へと時間を遡る、通常とは逆の歴史叙述法」

Ⅱ．過去の作例

① 吉田東吾[1]『倒叙日本史』（全10巻、早稲田大学出版部、大正2年）

② 樋口清之[2]『逆（さかさ）・日本史』（全4巻、祥伝社、1986-89　）

◆吉田東伍は倒叙体を採用した理由を次のように述べる。

「予は幼少より史類を嗜む、而も講読に師無し、其帝国の通史を独習する毎に、先・開巻第一の上古が、茫漠明滅して玄夢の如きに会ひ、頭脳徒に苦み、得る所少きを憾みたり。又、史家の筆力は、編末に至れば多く衰殺し、吾人の現在・未来に対して、接近の関係ある重要時代は、却りて簡略に流るゝを憾めり。此に於いて、予は「近きより遠きに至り、低きより高きに登る」の法則〈啓発法〉を移して、読史の一則と為し、今代・近世を先とし、中世・古代を後にせば、前の憾或は除く可からむと思惟したり。既に、之を以て自己の家法と為すに止まらず、此啓発法に合へる史書を編まむと欲す」　（第1冊『明治国勢発展編』、1頁）

Ⅲ.倒叙体のメリット）

① 私達が現に生きる今から叙述が始まり、しかも現在の特徴や問題点の発生する経緯が、時代を遡って追究されるので、分かりやすく、面白くなる。この点について、樋口清之ははるかに積極的な主張をしている。

「“なぜ”という疑問をタテ糸にして歴史を遡っていく方法――倒叙法こそ、歴史本来の姿だとわたしは考えている。歴史とは、単に昔を調べるためだけの学問ではなく、今日を知り、明日を洞察するための、何よりの手がかりなのだから」（樋口、Ⅰ－8）.

---

[1] 吉田東伍（1864-1918）は、明治大正期の地理歴史学者、早稲田大学教授。『大日本地名辞書』の編纂者。

[2] 樋口清之（1909-1997）は、考古学者、歴史家。登呂遺跡を発掘調査、国学院大学教授。

なぜ、面白いということを強調するかは、下記の批判を念頭におくから。

「その旧態然としたスタイル、紋切り型の説明、なんの刺激も感じられない発想など、文学史に対する批判には事欠かない。」[3]

② 通常とは異なるパースペクティヴなので、頭の働きが刺激されて、面白いイアディアが浮かんでくる可能性が高い。
③ インドの現状に関心が高まっている状況に適合的。
④ 倒叙体による本格的な通史はほとんど見当たらないので、知的な冒険として試みるに値する。

Ⅳ、倒叙体採用の条件

① 現在の文学状況がきちんと把握・分析できること。(私たちにとっては、なかなか高いハードルか)
② 叙述の対象であるインド文学史が断絶性よりも連続性を示すこと。
樋口清之は日本史を叙述するのに、なぜ倒叙法を採用したのか、そしてヨーロッパ史に倒叙法を適用することが難しいのはなぜか、その理由を次のように説明している。

[社会的な大変革を経験していない]「お国柄の日本にあっては、歴史は過去の必然であり、身近に起こった出来事は、かならずそのお手本を過去に求めることができる。だから、『なぜ、こんなことが起こったのか』と言う疑問を持てば、その答えは前の時代に、さらには、その前の時代に存在する。

私は、かねて日本史とは「ホワイ（＝why＝なぜ）の歴」だと主張してきたが、その真意は以上のことであり、「逆に見れば歴史は面白い」とする根拠も、じつにここにあるのである。

他方、欧米社会にあっては大変革のたびに、その体質が極端に変貌し、アンシャン・レジーム（旧体制）という言葉から明確なように、社会体制が根こそぎ断絶し、まるで異国のような様相を呈する。だからその歴史は、編年的に俯瞰できても、現代から過去へ遡るといった倒叙の方法を採ることは、きわめて困難となる」(樋口Ⅰ－78)。

➔はたしてヨーロッパは、樋口氏の言われるような断絶的な発展をしてきたのか、おおいに検討の余地がある。根こそぎの断絶というのは、人間の生活が基本的には

[3] 多賀茂「文学史」(大瀬康介編『文学をいかに語るか：方法論吐トポス』新曜社、1996) p. 91.

く同じことの繰り返しの上に成り立っている以上、考えにくい。敗戦の日にも電車や汽車は、時刻表どおり運行していたはず。しかし、1945年8月15日を境に、世相が一変したことは間違いない。歴史は連続性の上に断絶し、断絶を繰り返しながら連続しているのではないか。

➔はたして本当に、インド文学史にこのような連続性が認められるか？この問いにも上述のように両面が認められよう。

➔しかし、これまでのこの研究会の議論からは、口承の伝統、叙事詩の伝統をはじめ、インド文学史の連続性がいくつものアスペクトで指摘されており、倒叙法の適用を許さないような断絶性はないように思われる。

③ 倒叙法は一人の著者が自由に用いるのは可能であっても、グループで採用するのは困難かもしれない。討議を重ね、メンバーが知恵を出し合い協力する体制が不可欠となる。(VI参照)

V．倒叙法を用いた叙述の概念図〈別紙Ⅰ〉

① 時代区分をどうするか？

(a)中世の始まりは、近代語の形成期（10～12世紀）あたりとする？

(b)近世の始まりは、16世紀のムガル朝の成立あるいはアクバルの統治期？

(c)近代の始まりは、インド大反乱（1857－58）の収拾と「直接統治」の開始？

(d)現代の開始は、1991年の「自由化」から？

◆なお、時代感の区切りはかなりの幅を見てゆるく設定し、地方語とのタイム・ラグを許容し、むしろそうすることで、よりリアルな時代の変遷のあり方を描く。（別紙Ⅱ参照）

◆時代区分を以上のようなインド史の通史の時代区分(通史自体の時代区分も上記のようなものとは異なる区分がある)を援用するか、それとも文学史に葉通史には還元されない独自の区分が必要とするか。(たとえば、丸谷才一の日本文学史は強く後者の立場を主張している)

◆Sahitya Akademi版の『インド文学史』（全9巻）の巻構成(別紙Ⅲ参照)

② 倒叙法では、別紙Ⅰの要素A<B, C・・・Nが厳選されればされるほど、叙述が容易になるだろう。

これまでの全体集会、運営委員会で話題にのぼった要素をあげると、

1　せめぎあう文学伝統

複数言語のせめぎあい➔複数文学のせめぎあい

同一言語の中における複数の文学伝統のせめぎあい

2　文学の場

３つの場

1） テクスト自体を作りだす場（語られる場）

2） 普及を可能にする具体化（写本伝承、移動に耐えうる変容能力）

3） 創作享受を条件づける場（宮廷、寺院、市場、儀礼の場、文学サークル、印刷所／出版社、

3　文学とそれを取り巻くもの

隣接分野との関係（歌、踊り、芝居、書道、絵画、彫刻・・・）

媒体（貝葉、紙、印刷、PC・・・）

4　世界文学としてのインド文学

◆境界をこえて溢れだすインド文学（説話の伝播など）＝国際化（同時に地方語化というモメントも作用していることに留意）

◆母語を文学語とせず、複数の文明の言語を使用し、それらの言語の文学を享受し創作する素養を持つ人間したことは、世界文学へと開かれた可能性を保持していたことにはならないか　（ヨーロッパ文学より世界文学への可能性を持っていたインド文学）

5「文学言語」と「話しコトバ」➔　「書承」と「口承」

〇上記の２項の関係には、「書く」より「話す」ことが優先する通時的傾向示していないか？➔ムシャイラおよび各言語の詩会

〇母語（日常会話に用いる言語）では文学を書かない伝統（母語≠文学語）

➔母語より「上等」な言語があり、時には日常会話の媒体になる。

（こうした傾向は、前近代の世界ではどこでも共通する点か）

6　韻文が散文に優越する

7　表現における性の誇示と極度の隠蔽

8　（以下、気づいた事項を追加・列挙）

③ ◆時期区分の境目の記述については、とくに最少の記述事項を指定する。

その事項とは、上記②の事項+各境界期に特有の事項（＊）

◆境界期において足並みをそろえれば、記述に整合性が得られよう。遡行する文学の流れを、境界期で縛って、記述にメリハリをつける。

◆境界期については、文学営為のセンターとその影響圏を示すような地図が作成できれば面白かろう。

◆境界期間の中間期は、それぞれの文学史に固有の叙述をする（その場合でも、（＊）については意識して記述を行なうことが望ましい）

◆こうしたやり方で叙述した場合、叙述の網の目からはこぼれてしまうけれども面白いトピックは、コラムという形で拾い上げていってはどうか。遡行する叙述の流れのなかに、いくつものコラムの島が浮かぶという構成はどうか。

◆作品の引用についても工夫を凝らし、たとえばラーマーヤナのスィーター誘拐の場面（Sītā haraṇa）が、通時的、共時的にどのような偏差を示すのかを明らかにできるような配列をすれば面白いだろう。

VI. 作業の進め方

1、各言語の作業班の設定

2．この作業班による各言語ごとの倒叙体の文学史稿の作成
この文学史稿を集成したものをもって、今科研股間内の成果とし、これをテクストとして教室で使用してみる。

3．次期科研で、この文学史稿の集成から、1冊の倒叙体インド文学史を作成することにする。そのための作業班を3〜4作り、各作業班は与えられた時期の叙述を作成する。それを全員にメールで送付し、訂正・改良箇所指摘してもらい、それに基づいて各作業班は、もう一度改定版を作成する。

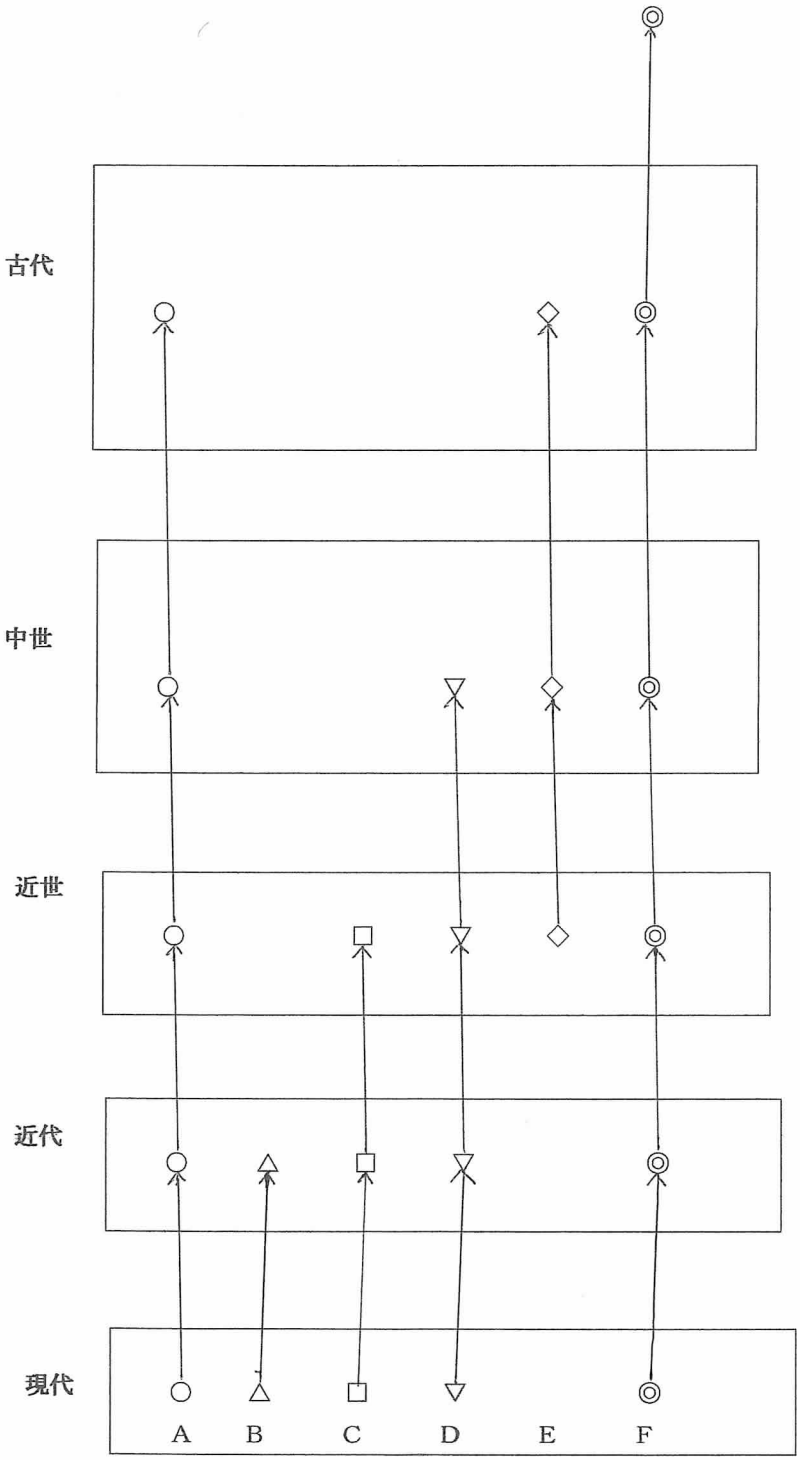
4、こうして出来上がった改定版を集めて、編集委員会がまとめて、完成稿を作成し、全員にメールでチェックしてもらい、手直しして最終稿を作成する。

5．地図、年表については、今科研期間中に作業版を作り、作業をすすめていく。

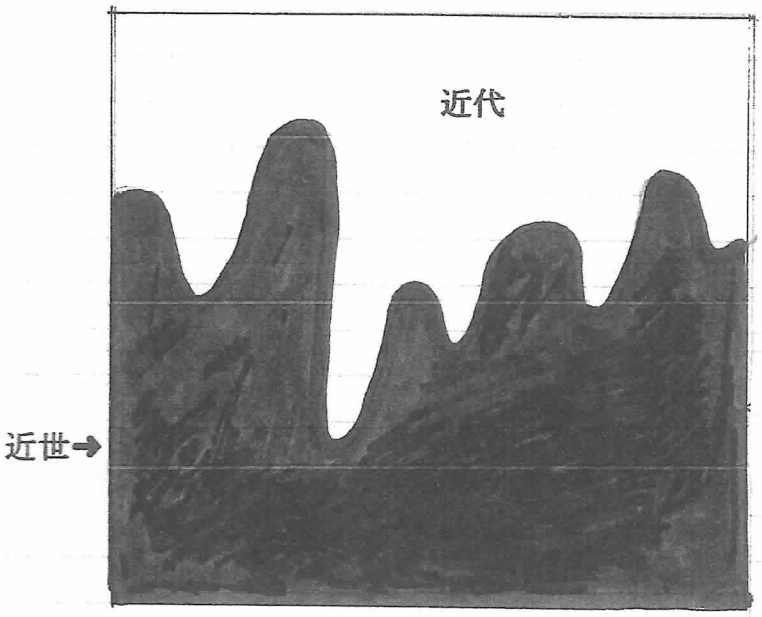
6．以上の工程表に目標の作業終了日をいれたものを付けて申請すれば、通りやすすくなる？

【別紙Ⅰ】

倒叙法概念図



【別紙Ⅱ】　近代になるタイミングは空間的に差異がある



[別紙 III] インド文学史の時期区分

Sisir Kumar Das, A History of Indian Literature; 1800–1910, Western Impact: Indian Response, Sahitya Akademi, 1991.

The periods can be enumerated as follows:

Period I	? 1500/1200 B.C.—477 B.C. *The Oral Tradition: Stability and Flux*
Period II	477 B.C.—A.D. 58 *From Oral Traditions Towards a Written Tradition* Sub-divisions: Buddha to Ashoka (477 B.C.—232 B.C.) Ashoka to Kanishka (232 B.C.—A.D. 58)
Period III	A.D. 58—A.D. 450 *The Age of Classical Literature: Kanishka to Kumara Gupta* Sub-divisions: Dominance of Prakrits and Tamil (A.D. 58—A.D. 250) Sanskrit Poetry and Tamil (A.D. 250—A.D. 450)
Period IV	A.D. 450—A.D. 850 *The Court and the Temple* Sub-divisions: Classical Sanskrit poetry (A.D. 450—A.D. 650) The Beginnings of Bhakti poetry (A.D. 650—A.D. 850)
Period V	A.D. 850—A.D. 1250 *The Confluence of Many Languages* Sub-divisions: Last phase of Middle Indo-Aryan and emergence of Modern Indian Languages (A.D. 850—A.D. 1050) Late phase of Sanskrit, expansion of epic poetry in Tamil and second phase of Bhakti Movement with the Virasaivas (A.D. 1050—A.D. 1250)
Period VI	A.D. 1250—A.D. 1604 *Great Traditions and Little Traditions: Conflict and Synthesis* Sub-divisions: Barakaris to Chaitanya (A.D. 1250—A.D. 1486) Chaitanya to Guru Arjun (A.D. 1486—A.D. 1604)
Period VII	A.D. 1604—A.D. 1800 *Continuity and Change* Sub-divisions: Continuation of the Older Traditions (A.D. 1604—A.D. 1700) Efflorescence of Urdu (A.D. 1700—A.D. 1800)
Period VIII	A.D. 1800—A.D. 1910 *Western Impact: Indian Response*